

本年の日供神饌講社大祭・饗宴祭は、六月三十日、近江八幡市・大津市講元講員の皆様により大膳職以下所役をご奉仕いただき、賑々しく斎行できました。ご報告とともに講員の皆様に厚く御礼申し上げる次第です。

饗宴祭特殊神饌・紫草の由来

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

額田王

紫草のほえる妹を憎くあらば人妻ゆえにわれ恋ひめやも

大海人皇子

万葉集を代表する相聞歌として知られ、紫草（むらさき）は万葉集を代表する花の一つといえます。細かい白い花を多く咲かせ、古くからの野草らしく、華やかさには欠けるのですが、素朴な雰囲気漂わせます。



紫色は古来高貴の色とされ、鮮やかな紫色の根を持つ紫草はその染料として、また外傷等に対する生薬として利用され、珍重されてきました。近江の蒲生野はその古くからの自



生地として知られています。天智天皇は蒲生野を愛され、御料地として大切にされてきました。右の歌も大津宮時代の蒲生野での葉刈りの折の歌またはそのあとの宴会の際の歌とされています。染料の素材として江戸時代末まで広く栽培されてきましたが、化学染料が普及してからは利用されなくなり、現在では自生地はほとんど壊滅、栽培も至難で、絶滅危惧種に指定され、各地で保存活動が行われています。近江神宮では、この栽培困難な紫草を講元の山中・田村両氏の方々にご尽力いただき、ご祭神ゆかりの草花として饗宴祭斎行当初より毎年采女が所役を奉仕してお供えています。

漏刻祭と献茶祭

六月十日は、大津宮盛時に時報を開始され、国民に時を知らしめられた、近江神宮のご祭神と特別のゆかりのある時の記念日。本年は大正九年の時の記念日制定より九十周年を迎えました。この日は毎年時計や暦に関係のある方々を中心に、多くの崇敬者も集い、漏刻祭が行われています。



今年は三十年前にロレックス社より奉納された古代火時計の、龍の背に渡す線香を線香業者の奥野晴明堂より奉納いただきました。線香の端に火をつけると燃え進むに従って両側に垂らした糸が切れ、錘が落ちて音を鳴らし、時を知らせる仕組みになっています。ほぼ十五分ごとに時を知らせます。



漏刻祭の前日の六月九日は、裏千家の家元の奉仕による献茶祭が毎年行われ、本年も裏千家大宗匠によるお点前が行われましたが、元来はこれも漏刻祭当日に同祭典中の奉納行事として、献茶が行われていたものでした。

また、献茶祭・漏刻祭の期間には、滋賀県華道協会加盟各流派の回り持ちにより活け花の奉納も行われています。今年は水無瀬未生御流のご奉仕により行われました。

例祭直会時の小コンサート

近江神宮七十年祭記念の奉納行事として、九州を中心に音楽活動を行っているフォークデュオ・ワルツ（サチコ&テツ）という歌手



左端は勅使様

の歌が、四月二十日の例祭の直会の折に小コンサートの行われ、奉納披露されました。ワルツのお二方は敬神の志篤く、白衣袴を着用して演奏するテツ（山川哲）氏のシンセサイザーによる越天楽今様の雅楽の音色や、特に皇后陛下のお若いころの御作「ねむの木の子守歌」（秋篠宮殿下のお誕生の折に山本正美氏が作曲）はまことに例祭の行事の場にふさわしく、勅使様も一緒に聞き入っていただきました。

小林よしのり氏『昭和天皇論』

小林よしのり氏の近著『昭和天皇論』に、百済救援軍の敗戦後の天智天皇の復興政策に習って戦後日本の復興を行っていくこうと考え

られた終戦直後の昭和天皇の祈りが採り上げられ、福岡県の朝倉宮跡などの関連史跡とともに、近江神宮が扱われています。小林氏は十数年前の『戦争論』以来、日本の伝統精神を護持回復する主張を漫画の形に託して、漫画とはいいがたい社会評論的な作家活動を行い、その主張は賛否の難しい部分もありますが、昨年の『天皇論』に続く『昭和天皇論』は、昭和天皇の御聖徳や知られざるエピソードなど、読みごたえのある内容となっています。一読をおすすめします。

本年後半の祭典行事

- 七月七日午前十一時 燃水祭
- 七月二十日 献灯祭
- 七月二十四日・二十五日 全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会
- 八月二十二日午後一時 献書祭
- 八月二十四日午前十一時 弘文天皇祭
- 十一月三日午後〇時三十分 流鏑馬神事
- 十一月七日午前十一時 御鎮座七十年記念祭
- 十二月一日午前十時 初穂講大祭

既に七十年祭記念事業にご奉賛いただいた方もおられますが、近日中に奉賛のお願い状を送らせていただきますので、ご多端のところ不躰なお願いばかりで、まことに恐縮ではありますが、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

今回もモノクロで、花の写真が生き生きと見られますので、ご覧ください。